

〈原著論文〉

看護学生が糖尿病フットケア演習から得た学び

Nursing student's learning from diabetic foot care training

中尾 友美¹, 石井 あゆみ², 隍 智子³

要旨

目的: 看護学部3年生に実施した糖尿病フットケア演習において、学生がどのような学びを得たか明らかにする。

方法: 看護学部3年生を対象に、糖尿病フットケア演習を実施した。演習終了後に記載した自己評価表のうち、フットケアの学びに関する自由記載回答を質的に分析し、フットケア演習で得た学びを明らかにした。**結果:** 分析の結果、25のサブカテゴリーを抽出し、【生活を反映する足であることを知る】、【フットケアに必要な基本的技術を学ぶ】、【患者の気持ちに気がつく】、【患者への関わり方を考える】、【フットケアへの関心を持つ】、【自己学習の大切さに気がつく】という6つのカテゴリーに集約した。**考察:** 学生は、足と生活を結び付けてアセスメントをすることや、患者とのコミュニケーションについて多くの学びがあった。また、患者と共に足をみることの重要性について、体感していた。

キーワード: フットケア, 糖尿病, 看護学生, 教育評価

Foot Care, Diabetes mellitus, Nursing Student, Educational Measurement

I. 緒言

国民健康・栄養調査(厚生労働省,2019)によると、「糖尿病が強く疑われる者」の割合について有意な増減はみられない。しかし、WHOがまとめた報告書「Global Report On Diabete (World Health Organization,2016)」において、有効な対策をしなければ、2025年までに世界の糖尿病人口は7億人以上に増えると予測されているように、依然として糖尿病人口の総数は多く、糖尿病への対策が求められている。また、糖尿病は、さまざまな合併症をきたし、中でも糖尿病足病変は、糖尿病神経障害や足壊疽など、人々のQOLを大きく損なう可能性がある。

糖尿病患者のフットケアについて、我が国では、2008年に「糖尿病合併症管理料」が新設された。これは、外来において一定の教育を受けた看護師が、糖尿病足病変ハイリスク要因を有する患者に対しフットケアを実施することにより、診療報酬として認められるものである。それに伴い、全国の多くの都道府県において研修が行われ、受講者は約3200名近くに達している(日本糖尿病教育・

看護学会,2020a)。

看護師に対するフットケア教育の広がりに伴い、外来でフットケアを実施する施設も増えている。澄川ら(2016)が、143施設のフットケアに関する実態を分析した結果では、89施設(62.2%)がフットケア専門外来を設置していた。実施しているフットケアの内容は、問診、視診、触診に加え、振動覚検査やアキレス腱反射の確認など神経障害の検査、陥入爪の処置など爪のケア、足浴、セルフケア教育などであった(坂元ら,2018)。また、フットケア看護については、フットケアに関することのみを実施するのではなく、フットケアと同時に間食を減らすための情報提供を行うなど、フットケア以外のセルフマネジメント支援も実施する取り組みも行われている(大西ら,2015)。

以上のように、臨床においては、糖尿病患者へのフットケアに関する教育が進んでいる。しかし一方で、看護学生に対しては、フットケア演習は実施しているものの、先行研究では高齢者を対象にしたもの(金子ら,2014)はみられるが、臨床で実施されているような、糖尿病に特化したフットケア教育を実施し、その評価を示した調査は少な

1 Tomomi NAKAO

千里金蘭大学 看護学部・看護学研究科

受理日:2022年9月2日

2 Ayumi ISHII

千里金蘭大学 看護学部

査読付

3 Motoko HORI

千里金蘭大学 看護学部

い。基礎看護技術におけるフットケアは、足の清潔を保つことを主な目的とするが、糖尿病フットケアは、足病変予防を目的とすることに加え、患者自身が足のケアを行えるようになるための患者教育という側面もある。したがって、足浴や爪切りなどの技術に加え、糖尿病の合併症を考慮した全身および足の観察や、神経障害の検査、患者へのフットケア教育などが加わる。A大学では、慢性看護学演習の中で、糖尿病フットケアとして、合併症を考慮した足の観察、神経障害の検査、実習で実施可能なケアとして爪やすりを実施し、学生も患者体験をすることで、フットケアに関する患者教育について理解を深めている。今回は、その学びを明らかにし、看護基礎教育における糖尿病フットケア教育について考察することにした。

II. 目的

本研究の目的は、糖尿病フットケア演習を受講した学生の学びを、明らかにすることである。

III. 研究方法

1. 対象

本調査の対象者は、対象としたA大学が看護学科の3年生に実施している糖尿病フットケア演習受講者64名のうち、研究同意の得られた50名とした。

2. 演習内容

演習受講者は、事前学習として、糖尿病看護フットケア技術第3版（日本糖尿病教育・看護学会,2020b）を参考にした糖尿病フットケアの意義、アセスメントの視点、神経障害の検査（音叉を用いた振動覚検査、モノフィラメントを用いた感覚検査）、爪やすりの実施方法、足の観察について教員からの講義を受講後、看護技術のオンライン教育ツールであるNursing Skills（Elsevier,2021）の「フットケア」に関する動画を視聴した。また、「足の状況」、「全身状態」、「生活状況」、「セルフケア状況」について、アセスメントの視点をまとめた。技術演習は、問診、足の観察、神経障害の検査（音叉を用いた振動覚検査、モノフィラメントを用いた感覚検査）、爪やすりとし、学生2名で患者役と看護師役を交代で実施した（表1）。

3. 調査内容

演習終了後に、足の観察を実施して学んだこと、患者体験を通して学んだこと、演習全体を通して学んだことについて、自由に記載してもらった。

4. 分析方法

学生が記載した記述を1つの内容ごとに区切り、回答のなかから不要な部分を削除し素データを作成した。次に、「フットケア演習における学生の学び」という視点で、類似した意味内容の要素について、サブカテゴリーを作成した。次に、抽象度

表1：フットケア演習内容

事前学習	フットケアに関する講義 ・糖尿病フットケアの意義 ・アセスメントの視点 ・神経障害の検査（音叉を用いた振動覚検査、モノフィラメントを用いた感覚検査） ・爪やすりの実施方法 ・足の観察 Nursing Skills ・「フットケア」動画の視聴（足の観察、足の洗浄、爪のケア、靴や靴下の選び方など） アセスメントの視点の整理 ・「足の状況」「全身状態」「生活状況」「セルフケア状況」について、アセスメントの視点をまとめた。
演習	2名の学生（1名が看護師役・1名が患者役）で下記の演習を実施する。 終了後に看護師役と患者役を交代する。 ①1名が患者役になり、足の観察を実施する。その際、足を見るだけではなく、「生活状況」、「セルフケア状況」についても確認をする。 ②足の神経障害の検査（音叉を用いた振動覚検査、モノフィラメントを用いた感覚検査）を実施する。 ③爪やすりを用いて爪を整える体験をする。

を上げて類似性を再検討しカテゴリーを作成した。分析にあたっては、研究者3名で考えが一致するまで検討をした。

5. 調査期間

調査実施期間：2021年5月

6. 倫理的配慮

本調査は、千里金蘭大学疫学倫理委員会の承認を得て実施した(K21-001)。対象者には、研究の主旨、研究参加拒否による不利益はないこと、データは匿名化することなどについて、文書と口頭で説明をした。研究参加の同意は、同意書の提出で確認した。

IV. 結果

分析の結果、456のデータから25のサブカテゴリーを抽出し、【生活を反映する足であることを知る】、【フットケアに必要な基本的技術を学ぶ】、【患者の気持ちに気がつく】、【患者への関わり方を考える】、【フットケアへの関心を持つ】、【自己学習の大切さに気がつく】という6つのカテゴリーに集約した(表2)。以下、カテゴリーとサブカテゴリーについて説明をする。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、代表的な内容は“ ”で示す。

【生活を反映する足であることを知る】は、《足から生活を知る》、《生活に関連付けた情報収集の大切さを知る》、《いろいろな足があることを知る》といった3つのカテゴリーで構成された。学生は、他者の足をみることで、人それぞれ足が異なっていることを認識していた。加えて、《足から生活を知る》の“足の状態を見ることで、対象者が普段どのような靴を履いているのか、どんな爪の切り方をしているのか、運動の程度などが、皮膚の厚さ、爪の形、足指の変形の仕方、胼胝のでき方などから判断することができた”や、《生活に関連付けた情報収集の大切さを知る》の“足の赤みがあれば、靴が合っているかということや普段どのように靴を選んでいくかなど、1つのことからさまざまな問題が考えられるので、痛みなどがないだけでなく、患者さんの暮らし方も情報収集していくことが大切だと分かった”のように、足をみながら生活状況の質問をすることで、日々の生活が足に影響を及ぼしていることにも気がつき、足から生活を

予測して患者に質問をし、フットケアのアセスメントにつなげられることを学んでいた。

【フットケアに必要な基本的技術を学ぶ】は、《足の観察方法》、《神経障害の検査》、《爪やすりの使い方》、《実際に触れて理解できる専用器具の使用法》、《多角的な足のアセスメント》といった5つのサブカテゴリーで構成された。これらは、演習で実施した内容であり、体験することで実施方法を理解したという内容であった。また、《足の観察方法》の内容で“右側や左側から見るだけでなく、足の下の方から見たり、足の甲の方から見ることで、見えないところが見えるようになった”や、《実際に触れて理解できる専用器具の使用法》の内容で“音叉のたたき強さによって結果は若干違ってくるが、ある程度の強さでたたかないといけないのだと実際やってみて分かった”とあるように、実施してみると出来ないことがあり、工夫しながら技術の活用を行っていた。

【患者の気持ちに気がつく】は、《足を見せることへの羞恥心》、《看護師から感じる気遣い》、《患者が感じる不安や苦痛》、《患者が落ち着く体位や環境》、《足を触られる感覚》といった5つのサブカテゴリーで構成された。学生は、患者役を行うことで、患者の気持ちを理解していた。また、看護師役の学生から受けるケアにより、安心したり不安になったりという感情も経験していた。そのことから、《看護師から感じる気遣い》の内容である“足に触れる前に「少し冷たいですよ。触りますね」とひと声かけたり、そっと触れたりする態度が患者さんを尊重する看護師の姿勢を示すことになるので、私も注意して実施しようと思った”のように、自分自身の関りを見直すことにもつながっていた。また、患者の気持ちだけでなく、《患者が落ち着く体位や環境》では、“落ち着いて話せる環境であると、今までの生活や自分の足に対する思いを話しやすと感じた”、“実施体位は看護役の時は「これくらいでいいかな？」と思っていた角度が意外と安楽でなかったとわかった”など、患者の安楽にも気を配る必要性も学んでいた。

【患者への関わり方を考える】は、《自然なコミュニケーション方法》、《フットケアの理解を促す声掛け》、《患者が返答しやすい質問の仕方》、《安心感につながる声掛け》、《患者が持つ自分の足への思いを知る大切さ》、《患者と共に足をみる大切さ》、《個別性をとらえた介入》といった7つのサブカテゴリーで構成された。学生は、実際にフットケア

表2-①：フットケア演習から得た学び

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な内容
生活を反映する足であることを知る	足から生活を知る	<ul style="list-style-type: none"> 足の状態を見ることで、対象者が普段どのような靴を履いているのか、どんな爪の切り方をしているのか、運動の程度などが、皮膚の厚さ、爪の形、足指の変形の仕方、胼胝のでき方などから判断することができた。 足の形であったり、固くなっている部分などがあれば、その足の形をしている人は、どのような生活を送っているのかや、どのような歩き方をしているのかなど、様々なことを想像してアセスメントすることができると思った。
	生活に関連付けた情報収集の大切さを知る	<ul style="list-style-type: none"> 足の赤みがあれば、靴が合っているかということや普段どのように靴を選んでいるかなど、1つのことからさまざまな問題が考えられるので、痛みなどがないだけでなく、患者さんの暮らし方も情報収集していくことが大切だと分かった。 足の観察だけでなく、普段の生活状況を聞くことも大切だということを学んだ。
	いろいろな足があることを知る	<ul style="list-style-type: none"> 人それぞれ足の形が違い、指1本1本丁寧にみなければいけないと思った。 日常生活で自分以外の足を観察したり、触れることはないで足の形状や爪の状態が違うんだということを実感した。
フットケアに必要な基本的技術を学ぶ	足の観察方法	<ul style="list-style-type: none"> 右側や左側から見ただけでなく、足の下の方から見たり、足の甲の方から見ること、見えないところが見えるようになった。 足趾の間は見るだけでなく、趾を広げることで観察することができた。
	神経障害の検査	<ul style="list-style-type: none"> 音叉を用いて振動覚の検査、モノフィラメントを用いての痛覚検査（神経障害の検査）の方法をしっかり学ぶことができ、検査結果をアセスメントすることができた。 神経学的検査は、やり方を初めてこの演習で知ったので正しいやり方を理解して、神経障害の有無についてアセスメントできるようになりたいと思った。
	爪やすりの使い方	<ul style="list-style-type: none"> やすりについては、実際にやってみることで足趾の固定方法を習得することができた。 爪のやすりがけが思った以上に難しかったが、きちんとできるまで練習できた。
	実際に触れて理解できる専用器具の使用法	<ul style="list-style-type: none"> 音叉のたたき強さによって結果は若干違ってくるが、ある程度の強さでたたかないといけないうのだと実際にやってみて分かった。 モノフィラメントの使い方、音叉の使用法は、動画で見ていたのにも関わらず、使用法は実際に使用してみないとイメージはつかないことがわかった。
	多角的な足のアセスメント	<ul style="list-style-type: none"> 患者の靴や靴下などの情報、歩き方や、気を付けていることなどの足に関する習慣も関連づけることで、より深いアセスメントに繋がると学んだ。 糖尿病患者のフットケアでは、足の状態や神経障害の有無の確認だけでなく、血糖コントロール状況や仕事、靴や靴下などの日常生活における情報も収集し、アセスメントする必要があるとわかった。
患者の気持ちに気がつく	足を見せることへの羞恥心	<ul style="list-style-type: none"> 足をまじまじと見られるというのは考えていたよりも、恥ずかしかった。 あまり他の人に足を集中的にみられることはないから、少しは恥ずかしかったため、やっぱり患者さんも抵抗のある人はいると感じたから、羞恥心に配慮することが改めて大切だということ学んだ。
	看護師から感じる気遣い	<ul style="list-style-type: none"> 初めは、足をじっくり観察されるのは恥ずかしいと思っていたけれど、看護師役の人が1本ずつ丁寧に見て下さって、大切にしてくれているのが伝わり嬉しい気持ちになった。 足に触れる前に「少し冷たいですよ。触りますね」とひと声かけたり、そっと触れたりする態度が患者さんを尊重する看護師の姿勢を示すことになるので、私も注意して実施しようと思った。
	患者が感じる不安や苦痛	<ul style="list-style-type: none"> モノフィラメントを使用する際の痛覚の検査のとき、目を閉じるので少し怖かった。 爪やすりをかけてもらった時に、やすりが少し深くまで入り、最初痛かった。
	患者が落ち着く体位や環境	<ul style="list-style-type: none"> 落ち着いて話せる環境であると、今までの生活や自分の足に対する思いを話しやすくなったと感じた。 実施体位は看護役の時は「これくらいいいかな？」と思っていた角度が意外と安楽でなかったとわかった。
	足を触られる感覚	<ul style="list-style-type: none"> 足をふれる手があたたかきもちよかった。 触られる時は、やさしく触られるより、強めの方が気持ちよかった。

看護学生が糖尿病フットケア演習から得た学び

表2-②：フットケア演習から得た学び

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な内容
患者への関わり方を考える	自然なコミュニケーション方法	<ul style="list-style-type: none"> ・観察することに集中してしまうと、聞きたいことを忘れてしまったり、会話が止切れてしまうので、前もって質問したい内容を確認しておく必要があると思った。 ・観察をしながらだと会話につまってしまうことがあったため、フットケアについてももっとしっかり学びを深め知識を蓄えることで、スムーズなコミュニケーションにつながれるようになりたい。
	フットケアの理解を促す声掛け	<ul style="list-style-type: none"> ・実際患者さんにフットケアを行う際は、なぜ足の観察をするのか、詳しく説明して理解を得たうえで実施することが大切だと学んだ。 ・声かけをするときに、「今自分で足を触ってみて〇〇はどうですか。」などの聞き方をすれば、より患者が主体的にケアに参加し足に関心を持ってもらえるのではないかと思った。
	患者が返答しやすい質問の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・生活状況について質問をされたとき、「足に負担をかけるようなことを何かしていますか」と聞かれ「例えばどんなことが負担になるといえるのかな」、「何て答えたらいいのだろう」と答えることが難しかった。このことから、看護師は抽象的な質問をするのではなく、的を絞って患者にとって分かりやすい質問をしなければいけないと学んだ。 ・フットケア中の会話では、質問をするだけでなく、どうしてその質問をしたのかを説明することで、分かりやすくなり、患者さんも応えやすくなるのではないかと思った。
	安心感につながる声掛け	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師が何も言わずに大丈夫ですとねと言うより、何を見て大丈夫なのかを教えてもらった方が安心できた。 ・フットケアを行う前には十分に説明をした後、フットケア中も異常な部分だけを指摘するのではなく、正常な部分も患者さんに伝えることで安心することができるのではないかと考えた。
	患者が持つ自分の足への思いを知る大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・足病変の予防と発見だけでなく、普段の生活や足への思いを対象者から聞いて知ることで、援助にも繋がっていくのだと感じた。 ・足病変になりやすい患者さんでは、フットケアについての考えがとても大切になってくると思うため、今回は聞くことができなかつた必ず聞くべきだと感じた。
	患者と共に足をみる大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師が一方向的にケアを行うのではなく、「今から乾燥していないか一緒に確認しましょうね」と一緒に行くことで自分の足の状態を知ることができることに加えて足に目を向けるきっかけになると感じた。 ・看護師が勝手に足をみるよりも、患者自身も足の観察を一緒にすることで、自分の足がどんな状態であるか直接確認できたり、看護師とも距離が近くなり、コミュニケーションをとりやすいということも学んだ。
フットケアへの関心を持つ	個別性をとらえた介入	<ul style="list-style-type: none"> ・人によって足の大きさはもちろん、指の長さや形が全く違って、その人にあった靴であるか、生活状況が影響して足に問題が生じている可能性があるかなど、色々な原因を考えながらその人にあった対処を考えなければいけないということも学んだ。 ・爪の手入れの方法は、患者のセルフケア能力によって、爪切りを使うかやすりを使うかわわたりするので、セルフケア能力の把握も大切だと学んだ。
	自分の足への関心	<ul style="list-style-type: none"> ・普段靴を選ぶ時に、どのようなことに気をつけているか意識したことがなかったけれど、患者体験を通して、自分にあった靴を捜すことの大切さや、足に対して意識して生活しなければいけないと感じた。 ・普段、足を気遣うことはほとんどないので、足のことやどんな靴を履くかを聞かれて答えている内に、自分でも自分がどんな姿勢が多いのか、どんな靴を履くことが多いのか、足裏の負担がかかっている位置等、気づいていなかった部分に気づくことが出来た。
	フットケアの大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・私は今回の演習を通して、糖尿病患者に対してフットケアを行う大切さについて学ぶことができた。 ・初めてフットケアを実施して、改めてフットケアの大切さを学ぶことができた。
自己学習の大切さに気がつく	フットケア技術習得への意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・動脈の触知がなかなか脈が触れなくて、何度も何度も探していると患者さんはどこか悪いのかなと不安にさせてしまうことがあるので、自分や家族で練習しておいてスムーズに見つけられるようになろうと思った。 ・爪のやすりがけでなく併抵のケアについても体験したいと感じた。
	足のアセスメントに必要な知識を持つ大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・知識の面では、フットケアに関する知識や足病変についての知識、また生活状況・セルフケア状況・全身状態におけるアセスメントを行うのに必要な知識がまだまだ不十分であることを学び、もっと教科書や参考書を利用して知識をつける必要があるなと感じた。 ・事前学習でやったフットケアに関する知識がどれだけあるかにより、患者さんに質問する内容が変わってくるので改めて事前学習は大切だと気がついた。
自己学習の大切さに気がつく	実際の足をみて触れる大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・どれだけ、イメージトレーニングをしていても実際に行ってみるとでは全然違ったため、一度実際に行うということが、知識や技術の定着のためには必要であると学んだ。 ・フットケアを実際にやってみて、動画のみではわからないこともあったので演習の大切さを感じた。

を行うことで、コミュニケーションの重要性を学んでいた。フットケアの際、実際にどのように声をかけたら良いか迷い、《自然なコミュニケーション方法》の「観察をしながらだと会話につまってしまうことがあったため、フットケアについてもっとしっかり学びを深め知識を蓄えることで、スムーズなコミュニケーションにつながられるようになりたい」のように、フットケアを実施しながらコミュニケーションを取る難しさを学んでいた。また、《患者が持つ自分の足への思いを知る大切さ》や《患者と共に足を見る大切さ》のように、フットケアの主体は患者であることにも気がついていった。

【フットケアへの関心を持つ】は、《自分の足への関心》、《フットケアの大切さ》、《フットケア技術習得への意欲》といった3つのカテゴリで構成された。学生は、フットケア演習を行うことで、糖尿病患者のフットケアの大切さを認識するだけでなく、自分自身の足にも興味を持つようになっていった。これは、「普段、足を気遣うことはほとんどないので、足のことやどんな靴を履くかを聞かれて答えている内に、自分でも自分がどんな姿勢が多いのか、どんな靴を履くことが多いのか、足裏の負担がかかっている位置等、気づいていなかった部分に気づくことが出来た」と述べているように、フットケアを受けることで、フットケアへの意識が高まる経験でもあった。また、演習で出来なかったところを復習する必要性や、実施しなかったケアの学習への意欲もみられた。

【自己学習の大切さに気がつく】は、《足のアセスメントに必要な知識を持つ大切さ》、《実際の足をみて触れる大切さ》といった2つのサブカテゴリで構成された。学生は、「事前学習でやったフットケアに関する知識がどれだけあるかにより、患者さんに質問する内容が変わってくるので改めて事前学習は大切だと気がついた」と述べているように、事前学習はしたものの、足のアセスメントを実施してみると、実践を行うにはまだ知識が不足していることを痛感していた。また、《実際の足をみて触れる大切さ》では、「どれだけイメージトレーニングをしても実際に行ってみるとでは全然違ったため、一度実際に行うということが、知識や技術の定着のためには必要であると学んだ」と述べているように、フットケアの修得は、理解しているだけでは不十分で実践をするには経験を積み重ねる必要性があることに気がついていった。

V. 考察

1. 患者理解を深める

学生は、フットケア演習を受講することで、【生活を反映する足であることを知る】、【患者の気持ちに気がつく】など、糖尿病患者に対する理解を深めていた。理解が深まった理由の一つには、フットケアで足を見ることに加え、足からその人の生活を想像しながら質問をしていくといった、患者役の学生との対話を経験することで、足とその人の生活がつながり、《足から生活を知る》ことを実感したり、《生活に関連付けた情報収集の大切さを知る》といった学びを得ることができたのではないかと考える。栩川ら(2013)は、フットケアを行う看護師の体験について、「フットケアで足の観察をしていく際に、同時に足病変が起こる原因もアセスメントしていく。そこで足病変と関連していく生活背景・習慣を知り、必然的に患者のそれまでの生活史や糖尿病との付き合い方を知っていく。」と述べている。今回の演習では、実際の糖尿病患者ではなかったものの、患者役の学生が自分自身の生活を振り返り返答したため、足の状況と患者役の学生の生活状況が一致し、足とその人の生活をつなげてアセスメントできたのではないかと考える。

【患者の気持ちに気がつく】では、フットケアを受けるにあたり、患者は《足を見せることへの羞恥心》を感じることもあるといった学びを得ていた。フットケアを受ける糖尿病患者の中には、羞恥心があり足を見せることを躊躇する場合があるため、看護師はそのような患者の気持ちを理解して関わる必要がある(中元,2013; 石橋,2015)とされている。学生が「あまり他の人に足を集中的にみられることはないから、少しはさかしかったため、やっぱり患者さんも抵抗のある人はいると感じたから、羞恥心に配慮することが改めて大切だということを学んだ」と述べているように、知識として知っていたことを実際に体感することで、より足を見られる人の気持ちを理解したのだと考える。

一方で、今回のフットケア演習は、実際の患者に実施したものではない。フットケアにおける患者との関わりでは、吉田(2019)が、「フットケアの対象は、足だけではなくその人自身である」と述べており、糖尿病とともに生きる人を理解することも含まれる。また、糖尿病足病変など合併症のある人々への関わりでは、金井(2019)が「糖

尿病や合併症をどのように感じ、どう受けとめ、病気と共にどう生きているかをまずとらえる。そして、合併症による機能障害のために何ができず、どうつらいのか、それらがADLや生活にどう影響しているのかアセスメントして、患者の世界体験をイメージする」と述べている。このような、糖尿病患者の体験については、学生同士の演習では感じ取れなかったことだと考える。したがって、今後は、実際の患者と対話する機会を作るなど、糖尿病患者の体験を理解する教育が必要だと考える。

2. 患者への関わり方

今回の演習では、【患者への関わり方を考える】ことについて、患者とのコミュニケーションに関する学びが多くみられた。《自然なコミュニケーション方法》や《患者が返答しやすい質問の仕方》、《安心感につながる声掛け》といった、フットケア以外の場面でも活用できる内容にとどまらず、《フットケアの理解を促す声掛け》が重要であることにも気がついてきた。フットケアの理解を促すために、“実際患者さんにフットケアを行う際は、なぜ足の観察をするのか、詳しく説明して理解を得たうえで実施することが大切だと学んだ”という結果のように、一方的にフットケアを行うのではなく、患者の理解を確認しながらケアを進めていく必要性を感じていた。

フットケアにおける患者への関わり方では、《患者と共に足をみる大切さ》に示されているように、足を共にみることが重要であることを感じ取っていた。患者と共に身体をみることの効果には、患者自身が認識していない生活に埋没した症状を、患者が糖尿病と関連付けて捉えられるようになること（米田,2017）、患者自身が足に触れることにつながり、良くなった足を実感したり足への関心が高まること（本田ら,2008）などがある。また、吉田（2019）は、フットケアの場で足に触れることについて、通常の会話のみの面接では起こりにくい居心地の良い距離感が、患者が自分の思いを安心して語ることに繋がると述べている。今回の演習では、学生が患者役であったため、患者の認識の変化まで体感することはできなかったと考えるが、吉田（2019）が述べるような、居心地の良さから対話がスムーズに行えた体験はできたのではないかと考える。また、一部の学生は、《自分の足への関心》で表されているように、患者体験

を通して自分の足に関心を持つことができていた。このことから、実際の患者ではないが、共に足をみる行為を通し、相手が変化する体験ができた学生もいたのではないかと考える。

VI. まとめ

1. 看護学生に対しフットケア演習を実施した結果、【生活を反映する足であることを知る】、【フットケアに必要な基本的技術を学ぶ】、【患者の気持ちに気がつく】、【患者への関わり方を考える】、【フットケアへの関心を持つ】、【自己学習の大切さに気がつく】という学びが得られた。
2. 学生は、フットケア演習を受講することで、足と生活を結び付けてアセスメントをする重要性を認識していた。しかし、実際の患者へのケアではなかったため、糖尿病を持ちながら生活をする患者の思いや体験については、十分に理解できていない面がある。
3. 患者とのコミュニケーションについて、多くの学びがあった。特に、患者と共に足をみることの重要性について、体感していた。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本調査は、対象者（学生）自身の意見に関する分析であり、対象者（学生）の学びを総合的に評価しているものではない。また、1つの大学のデータであるため、他大学の学生など、対象を広げて分析することが必要である。

謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆さまに厚くお礼申し上げます。

文献

- Elsevier. (2022). Nursing Skills. 2022年7月28日閲覧, <https://www.elsevier.com/ja-jp/solutions/nursing-skills>
- 本田育美, 藤井夕香, 鳥井信子, 地崎真寿美. (2008). 患者自身が「自分の足に触れる」ケアの効果. 三重看護学誌, 10, 71-75
- 石橋理津子. (2015). 【基本知識から外来開設・運営のコツまでを伝授!糖尿病フットケア外来の知

- 識・手技・連携】基本を学ぼう!糖尿病とフットケア フットケアが患者さんに与える影響とは. 糖尿病ケア, 12(3), 230-232
- 金子千晴. (2019). 糖尿病合併症をもつ人の看護 みて、聴いて、触れて、こころで感じて. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 23(1), 70-73
- 金子直美, 佐藤光栄, 上野良子, 他. (2014). 看護学生によるフットケア演習の効果 フットケア前後に唾液アミラーゼ測定を用いて. 日本看護学会論文集看護教育, 44, 14-17
- 厚生労働省. (2019). 令和元年国民健康・栄養調査報告. 2022年7月28日閲覧, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/eiyuu/r1-houkoku_00002.html
- 中元美恵. (2013). 手技・セルフケア指導のコツがわかる 糖尿病フットケアのハテナを解決!Q&A25】 ナースが行うフットケアのポイント 足を見せるのをいやがる患者さんの足を見るアイデアはありますか. 糖尿病ケア, 10(3), 240-241
- 日本糖尿病教育・看護学会 編集. (2020a). 糖尿病看護フットケア技術第3版. 日本看護協会出版会. 232-243
- 日本糖尿病教育・看護学会 編集. (2020b). 糖尿病看護フットケア技術第3版. 日本看護協会出版会. 44-123
- 大西みさ, 上野栄一. (2015). フットケア外来における糖尿病指導効果に関する研究, 段階的なセルフケア評価質問紙 (GSEQ) と間食に焦点をあてた解析から. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 19(1), 5-13
- 坂元綾, 池田光徳. (2018). 高知県内における糖尿病患者のフットケアに関する調査. 高知女子大学看護学会誌, 44(1), 136-144
- 澄川真珠子, 齋藤重幸, 久保田稔. (2016). 糖尿病フットケア実態に関するアンケート調査—日本糖尿病学会教育認定施設及び教育関連施設を対象として—. 糖尿病, 59(11), 748-758
- 榎川綾子, 黒澤昌洋. (2013). 糖尿病足病変入院患者にフットケアを行う看護師の体験. 日本下肢救済・足病学会誌, 5(3), 207-212
- World Health Organization. (2016). Global Report On Diabetes. World Health Organization. 2021年4月3日閲覧, http://apps.who.int/iris/bitstream/10665/204874/1/WHO_NMH_NVI_16.3_eng.pdf
- 米田昭子. (2017). 今こそ, 五感を使って身体に働きかける 響き合い, 互いの可能性を拓く. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 21(1), 76-80
- 吉田多紀. (2019). 【一から始める糖尿病フットケア】 糖尿病患者への予防的フットケア フットケアとセルフケア支援の実際. 日本フットケア学会雑誌, 17(2), 78-84